

## 江戸時代の災害と救済

人は生活する中で、しばしば自然災害に見まわれます。特に日本列島は地震の多い地ですから、長い歴史のなかで何度も大きな地震の被害を受けてきました。また、気候の変調による農作物の不作が人々の生活を脅かしました。江戸時代には何度かの地震が起こり、飢饉にあつたりして多大な被害を受けたのでした。しかし、こうした災害に対して人々は助け合うことによつてしのいできたのです。

大東市域においても、江戸時代には何度かの地震に見まわれました。

例えば、嘉永7年(1854)

6月14日(実際には15日午前2時ごろ)、近畿地方を襲った大地震は非常に大きなもので、人々を驚かせたようです。

当時の古文書には「前代見(未)聞之大地震」と表現されています。

この地震によつて、深野南新田の弥治兵衛と万兵衛の家が倒壊しました。そこで、信楽代官所(滋賀県甲

賀市多羅尾)からその実態調査の役人が派遣されています。また、すぐに復興に向けた活動が進められ、派遣された役人の経費や復興に向けた費用の一部は村で負担されました。

享保17年(1732)に西日本を襲った大飢饉では、多くの被害者が出ましたが、人々は生きるために自発的に困窮した人を助けました。このように、江戸時代にはすでに、困ったときには助け合うという精神が根付いていたようです。

こうした災害と救済を垣間見ることができると古文書は、7月31日まで歴史民俗資料館で展示されています。

(市史編纂委員 岡村喜史)



3行目に「前代見(未)聞之大地震」と書かれています  
〔嘉永7年(1854)6月の大地震〕